

研究ノート

理想的教師像に及ぼす性格特性の影響

Personality traits and metacognitive abilities affect college students' images of ideal elementary teacher

Haruo KIKUNO, Qi LI, Yuichiro KIKUNO & Satoshi YAMADA

菊野 春雄*・李 琦**・菊野 雄一郎***・山田 悟史****

What characteristics and qualities do college students think are essential for an ideal elementary teacher? Do their personality traits and metacognitive abilities affect their ideal elementary teacher images? To address the above questions, we used a questionnaire involving items assessing students' personality, metacognitive ability and their images of ideal elementary teachers. Our data revealed that the maintenance function is considered essential for an ideal elementary teacher by college students. Furthermore, participants who considered "M type teacher" as an ideal teacher had relatively more adaptive personality traits and better metacognitive ability than participants who considered "PM type teacher" as an ideal teacher. These findings suggest that personality traits and metacognitive abilities have an effect on college students' images of ideal elementary teacher.

Key word: ideal teacher, PM theory, metacognition, personality trait, favorite subjects

- I. 問題と目的
- II. 方法
- III. 結果
- IV. 考察
- V. 引用文献

I. 問題と目的

学校では、子どもにとって教師は大きな存在であり、クラス集団のリーダーでもあり、子どもが頼る大きな存在であり、学習活動やクラス集団などの日常活動などでも大きな影響力を持っている。

それでは、子どもはどのような教師を理想としているのであろうか。保坂(2003a; 2003b; 2004a; 2004b)は、中学生と高校生がどのような教師を理想としているのかを調べている。

保坂(2003b)は、中学生の理想的な教師について8つの因子を見出している。すなわち、「カウンセリング・マインドで生徒に接し、学力をつける授業をする」「英語の高い運用能力を持ち、コミュニケーション能力がつく楽しい授業をする」「知識・教養が豊かで質の高い授業をする」「厳しく指導し英語力をつける」「生徒の立場に立った授業をする」「人間性がすぐれ、生き方を考えさせる授業をする」「総合的な英語力がある」「授業と関係ない話をする」の因子である。これらの結果は、学習指導について熱心な教師と共に、生徒の立場に立った教師が中学生の理想的であることを示唆している。

保坂(2003a)は、高校生の理想的な教師に

* 本学経営学部教授
** 東京大学文学部助教
*** 長崎大学医学部助教
**** 本学経営学部准教授

についても調べ、6つの因子を見出している。「受験学力がつく質の高い授業をする」「知識・教養が豊かである」「生徒の立場に立った授業をする」「カウンセリング・マインドを持って生徒に接する」「厳しい指導で英語力をつける」「英語の高い運用能力を持つ」の6つの因子であった。中学生との結果とは多少違いは見られるが、高校生においても学習指導について熱心な教師と共に、生徒の立場に立った教師が理想的であることを示唆している。

保坂(2004b)は、高校生にとっての理想的教師像をPM理論に基づいて検討している。PM理論とはリーダーシップについての理論で、リーダーシップにはP機能(Performance function)とM機能(Maintenance function)の2つの機能があると仮定している。P機能とは、集団を目標に到達させる機能である。M機能とは、集団を維持する機能である。この機能の組み合わせにより、P機能とM機能の強いPM型リーダー、P機能は強いがM機能は弱いP型リーダー、P機能は弱いがM機能は強いM型リーダー、P機能とM機能ともに弱いpm型リーダーに分けることができる。高校生の学業成績に基づいて分析したところ、成績上位の高校生は、主としてP機能的要素の強い指導力を期待していた。他方、成績下位の高校生は、P機能的要素とM機能的要素の強い指導力を期待していた。この結果は、高校生では、成績などによって、理想とする教師像の機能が異なることを示している。

小学生は教師をどのように見ているのだろうか。紅林・中村・井上・長谷川(2012)は、小学生による教師とらえ方について調べている。その結果、「叱ってくれる」「勉強を教える」など教師の指導的な役割に関する見方が見られた。他方で、「許してくれる」「おもしろいことをいう」など教師の優しさに関連する見方も見られた。この結果は、小学生は教師を、いかに指導的に教育しているかの観点と、ゆとりをもって教育しているのかという観点で見ていることを示唆している。

それでは、大学生はどのような教師像を持っているのだろうか。松永(2015)は、幼稚園・小学校教員免許状の取得しようとして

いる学生に理想とする教師像はどのようなものかを調べている。その結果、教師は厳しいだけでなく、基本的には優しい教師を求めていることが明らかになった。そして、親身になって子どもの相談にのるなど、距離の近い教師を理想的な教師像としていることが明らかになった。大学生においても、指導的に教育しているかの観点と、ゆとりをもって教育しているのかという観点を重視することが見られる。上述した研究では小学生、中学生のように教師に教えられる立場であったが、自分が教える立場になった時の理想的な教師像に共通する点がみられる。

豊田・三木(1996)は、教職を目指す大学生と現職教師に、理想的な教師の特徴を記述させている。その結果、大学生は、教師の人間性に関する特徴を理想的教師像において重視していた。また、石崎(2014)は教育実習に行かない非教育学生と実習に行く教育実習生を調査協力者として、教師の資質能力について調べている。その結果、非教育実習生に比べ教育実習生の方が、教職に対して高い理想像を持っていることが明らかになった。この結果は、教職を希望する学生の方が、高い理想をもって学びを行っていることを示唆している。

菊野・菊野・李・山田(2017)では、教師を目指す大学生に理想とする教師像をPM理論の質問項目を使って尋ねた。その結果、PM型、P型、M型、pm型の教師を理想とするものはほぼ同数であった。また、P機能とM機能を比較したところ、P機能よりもM機能がある教師になることを理想としている傾向がみられた。教職を希望する学生は、子どもの目標を達成するよりも、子どもとの関係などクラスの間を維持することを大切にしている教師を理想とすることを示唆している。

そこで、本研究では、子どもにとって教師とは何かを明らかになる手掛かりの一つとして、理想的な教師像について明らかにしたい。特に、本研究では、子どもの理想的な教師像にどのような要因が影響するのかについて検討しようとした。

それでは、子どもの理想的教師像にはどの

ような要因が影響するのであろうか。理想的教師像に影響する要因を特定するために、本研究では、メタ認知と性格特性の要因に絞って、これらの要因が理想的な教師像にどのように影響するのかを調べた。

メタ認知は高次の認知であり、「自分の中の自分」もしくは「自分の認知を客観的に認知する機能」ともいわれ、自分の思考や行動を自分自身でモニターしコントロールする認識機能である(Flavell, Friedrichs & Hoyt, 1970; Flavell, 1976)。メタ認知をスムーズに機能することにより、子どもが主体的に学習し、判断し行動できる。このメタ認知は、学校教育現場だけでなく、学校以外の社会的場面などでも応用されている(三宮, 2008など)。Brown (1978)は、メタ認知は以下の5つの下位能力で構成されていると仮定している。(1)自己の能力の限界を予測する能力。(2)自分にとって、今何が問題かを明確にできる能力。(3)問題の適切な解決法に気づく、そして解決策のプランを立てる能力。(4)自分の考えていることが正しいかどうかを点検とモニタリングする能力。(5)実行結果と目標を考慮し、実行中の方略の続行、中止を判断する能力。このようにメタ認知はいくつかの下位能力によって構成されている。これらの下位能力によって、より高次の判断ができ、それぞれの場面に適合した主体的に判断し行動できると考えられる。

それでは、大学生が子どもの頃に理想としていた教師像に対して、メタ認知がどのように影響するのであろうか。メタ認知の能力が高まることで、より良い教師像を持てるのであれば、教員養成課程でもメタ認知を促進する教育が必要となるだろう。しかし、メタ認知と理想的な教師像についての関係を調べた研究は著者の知る限り認められない。メタ認知と理想的教師像の関係については、メタ認知能力が高いほどP機能よりもM機能の強い教師を理想とすることが予想される。P機能が強い教師の場合、子どもに対して指示的になりやすいだろう。他方、M機能の強い教師の場合、子どもの気持ちを尊重したうえでの対応が多くなるだろう。メタ認知能力が高い

子どもほど、主体的に判断し行動する傾向が高い。そのため、メタ認知能力の高い子どもにとっては、指示的になりやすいP機能の強い教師よりも、子どもの気持ちを尊重したM機能の強い教師の方が、学習活動やクラスでの活動を行いやすいのではないだろうか。そのため、メタ認知能力の高い子どもの方が、P機能よりもM機能の強い教師を理想とするのだろうと予想した。

次に、教師の理想像に性格はどのように影響するのであろうか。菊野ら(2017)は、教師を希望する大学生を調査協力者として、子どもの頃に考えていた教師像と性格特性との関係を調べている。その結果、勤勉性、外向性、情緒安定性、協調性の性格特性の強い者ほどP機能よりもM機能がある教師を理想としていることが明らかになった。この結果は、社会的適応性の高い者ほど、P機能よりもM機能が強い教師を理想とすることを示唆している。そこで、本研究でも、ビッグファイブの性格検査項目を用いて社会的適応性の高い者ほど、P機能よりもM機能が強い教師を理想とするのではないかと予想した。

II. 方法

(1) 調査協力者

調査協力者は大学生121名であった。内訳は、男子学生65名、女子学生56名であった。平均年齢は、19.02歳で、年齢範囲は18歳から21歳までであった。

(2) 研究計画

本研究は、理想とする教師像を従属変数、メタ認知と性格特性を独立変数として、研究を実施した。

(3) 調査手続き

調査対象者に調査用紙を渡し、調査の協力を依頼した。調査を依頼する際、調査協力者に対して、本研究の目的を説明し、調査協力者には調査を同意・拒否する権利があること、調査データに関して匿名でなされ研究者には守秘の義務があること、研究結果を社会にフィードバックするため学会誌等に公表す

ることを説明し、調査参加を依頼した。なお、調査は匿名で個人が特定されないこと、成績等に影響しないこと、調査を拒否したい場合は調査用紙については提出する必要がないことなどを説明した。

(4) 調査内容と調査尺度

調査項目は、調査内容説明文、フェースシート、教科目の好き嫌い、教師用のリーダーシップについての質問項目、メタ認知の質問項目、性格特性の質問項目で構成されていた。

説明文では、研究倫理に基づいて、研究題目、研究の目的、研究データの使用される範囲、守秘の義務、社会的フィードバックについて記述した。また、フェースシートでは、調査協力者の年齢、性別、きょうだい数、出生順序についての質問を行った。

理想とする教師のリーダーシップについては、三隅・吉崎・篠原(1977)の作成した学級担任教師のPM式指導行動の測定尺度を用いた。質問項目では、調査参加者に「小学校の時にどのような「先生」を理想と考えていましたか」と小学校時代の理想とする教師像について質問紙測定尺度に答えるように求めた。この尺度では、P項目とM項目のそれぞれ5項目の合計10項目で構成されていた。たとえば、P項目では「忘れ物があると注意する」や「宿題などをきちんとするように厳しく言う」などの項目が含まれていた。他方、M項目では、「子どもと一緒に遊ぶ」「全ての子どもを同じように対応する」などの項目が含まれていた。これらの質問項目に対して、被調査者がどのような教師になりたいかを、5つの選択肢から1つを回答させた。回答は、「全く当てはまらない」から「大変よく当てはまる」の6件法で答えを選択するようになっていた。

教科目の好き嫌いについては、小学校の時期における国語、社会、理科、算数、体育、図工、音楽の7科目について好き嫌いを質問した。具体的には、各科目について、「大変嫌い」から「大変好き」の4件法で答えを選択するようになっていた。

メタ認知については、阿部・井田(1977)の作成した成人用メタ認知の測定尺度を用い

た。この尺度では、モニタリング、コントロール、メタ認知的知識のそれぞれ8項目の合計24項目で構成されていた。たとえば、モニタリングでは「課題が終わった時点で、自分の立てた目標の達成度を評価している」や「課題や問題が解決した後、すべての選択肢を考慮したかどうか振り返っている」などの項目が含まれていた。コントロールでは、「理解できないときには、やり方を変えてみる」「自分の理解の助けになるようテキストの構成や目次を利用している」などの項目が含まれていた。メタ認知的知識については、「過去に上手くいったやり方を試みている」「自分は何が得意で何が不得意かをわかっている」などの項目が含まれていた。これらの質問項目に対して、6つの選択肢から1つを回答させた。回答は、「全く当てはまらない」から「大変よく当てはまる」の6件法で答えを選択するようになっていた。

性格特性は、青木(2011)によるビッグファイブを測定する質問紙を用いた。ビッグファイブの質問紙は、「外向性」「協調性」「勤勉性」「情緒安定性」「開放性」の5つの性格特性を測定する質問項目5項目、合計25項目で構成されていた。たとえば、「外向性」では、「他の人と比べると話し好きです」や「どちらかという土地で目立たない方です」などの項目が含まれていた。「協調性」では、「思いやりがある方です」や「親しい仲間でも、本当に信用できません」などの項目が含まれていた。「勤勉性」では、「問題を綿密に検討しないで、実行に移すことが多い」や「どちらかというのんきな方です」などの項目が含まれていた。「情緒安定性」では、「どうでもいいことを、気に病む傾向があります」や「自分で悩む必要のないことまで心配する」などの項目が含まれていた。「開放性」では、「将来のことを見通すことができる方です」や「難しい問題にぶつかると、頭が混乱することが多い」などの項目が含まれていた。回答は、「全く当てはまらない」から「大変よく当てはまる」の6件法で答えを選択するようになっていた。

Ⅲ. 結果

結果の分析に際して、本調査に参加した121名の内、回答が不完全な8名の回答があったので、それらの回答については分析から削除した。したがって、本研究では113名の回答に基づいて分析を行った。

(1) 理想とする教師のリーダーシップの機能

表1は、学生が小学生時代に理想とした教師のリーダーシップにおけるP機能とM機能についての平均値と標準偏差を示したものである。F検定を用いてP機能とM機能の差について検定をした。その結果、有意な差が認められた($F(1,113)=217.79, p<.01$)。この結果は、参加者が理想とする小学生時代の教師について、P機能よりもM機能がある教師を理想としている傾向があることを示している。

表1 学生が理想とする教師のリーダーシップの機能の平均得点 (括弧内は標準偏差)

P機能	M機能
11.71 (2.10)	16.19 (2.37)

(2) 理想とする教師のタイプ

表2は、学生が理想とする教師のタイプをP機能並びにM機能の平均点に基づき、P機能とM機能の高低の組み合わせによって、PM型、P型、M型、pm型に分け、それぞれの人数と割合を示したものである。学生が理想とするタイプの人数について χ^2 検定をしたところ有意であった($\chi^2(3)=163.12, p<.01$)。そこで、Ryanの名義水準を用いた多重比較を行った。その結果、P型($CR=8.89, p<.001$)・M型($CR=5.08, p<.001$)・pm型($CR=9.06, p<.001$)よりPM型が有意に多いことが明らかになった。また、P型($CR=4.93, p<.001$)・pm型($CR=5.20, p<.001$)よりM型が有意に多いことが明らかになった。これらの結果は、学生が理想とする教師タイプには、pm型やP型よりもM型、M型よりもPM型が有意に多いことを示している。

理想とする教師像としてP型を選んだ参加

者は1名、pm型を選んだ参加者いなかった。そのため、以下の分析では、PM型を選んだ参加者84名とM型を選んだ参加者のデータに基づいて分析を行った。

表2 理想とする教師像のタイプと人数・割合

理想とする教師のタイプ	人数	割合(%)
PM	84	73.68
P	1	0.88
M	29	25.44
pm	0	0.00

2. 理想とする教師像に影響する要因

(1) 理想とする教師のリーダーシップの機能と科目の好き嫌いとの関係

図1は、理想とする教師がPM型・M型とするものについて、好きな科目に違いがみられるのかを図示したものである。これについて、2(教師像)×7(教科)の分散分析を行った。その結果、教科の主効果が有意であった($F(6,666)=6.39, p<.01$)。Holmによる単純効果の検定を行った。その結果、算数と国語($p<.05$)、社会と体育($p<.05$)、理科と体育($p<.05$)、算数と体育($p<.05$)、算数と図工($p<.05$)、算数と音楽($p<.05$)、音楽と体育($p<.05$)の間で有意な差が認められた。

また、10%までの危険率を許せば、教師像の主効果は有意な傾向が見られた($F(1,111)=3.57, p<.10$)。すなわち、理想的教師像をPM型とした参加者よりも、M型とした参加者の方が、各科目をより好きである傾向が見られたことを示している。なお、この他の要因間の交互作用は有意でなかった。

(2) 理想とする教師像とメタ認知との関係

図2は、理想とする教師像とメタ認知との関係を示したものである。2(教師像)×3(メタ認知)の分散分析を行った。その結果、メタ認知の主効果のみが有意であった($F(2,222)=49.31, p<.01$)。Holmによる単純効果の検定を行った。その結果、モニタリングとメタ認知的知識の間($p<.05$)、コントロールとメ

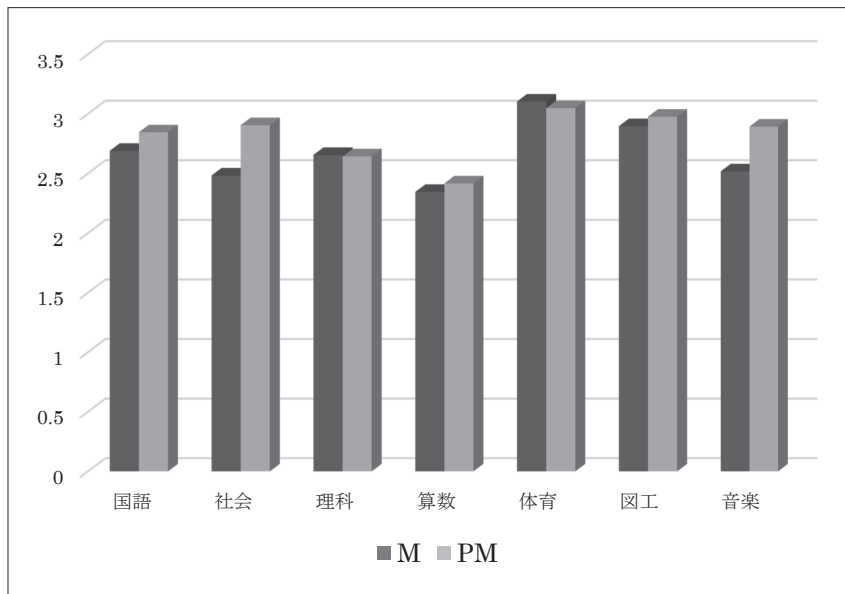


図1 理想的教師像と好きな科目

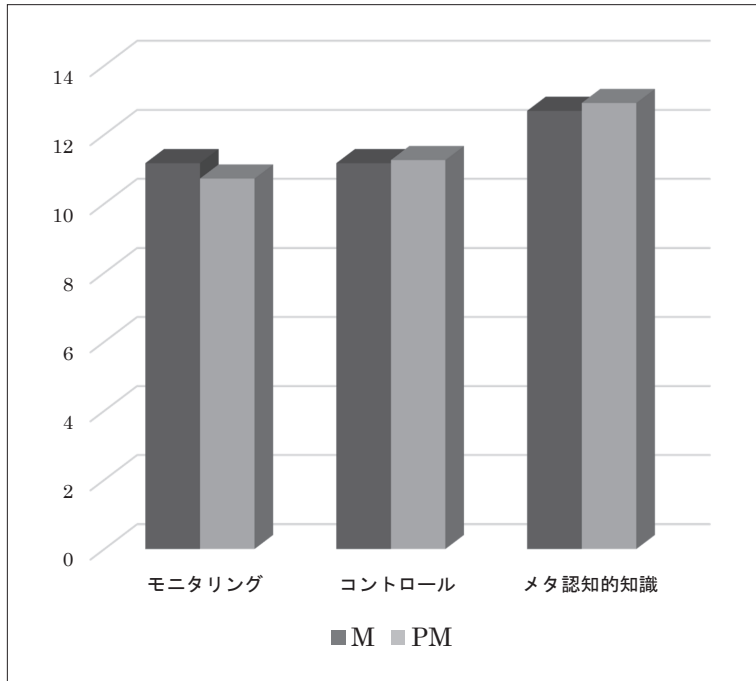


図2 理想的教師像とメタ認知

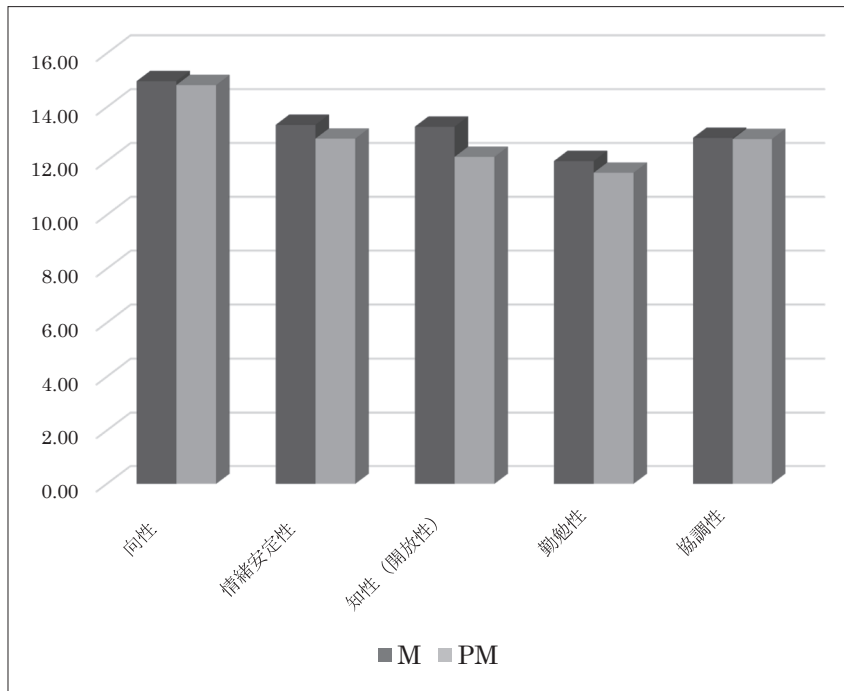


図3 理想的教師像と性格特性

タ認知的知識の間($p < .05$)で有意差が認められた。なお、教師像の主効果($F < 1.00$)と教師像とメタ認知の交互作用は有意でなかった。

(3) 理想とする教師像と性格特性との関係

図3は、理想とする教師像と性格特性との関係を示したものである。2(教師像)×5(性格特性)の分散分析を行った。その結果、教師像の主効果が有意であった($F(1, 111)=4.34$, $p < .05$)。この結果は、PM型の教師を理想とする者よりも、M型の教師を理想とする者の方が、性格特性の得点が有意に高いことを示している。

また、性格特性の主効果も有意であった($F(4, 444)=43.41$, $p < .01$)。Holmによる単純効果の検定を行った。その結果、情緒安定性より向性($p < .05$)、知性より向性($p < .05$)、勤勉性より向性($p < .05$)、勤勉性より知性($p < .05$)、勤勉性より協調性($p < .05$)の得点が有意に高いことを示している。なお、教師像と性格特性の交互作用は有意でなかった($F < 1.50$)。

IV. 考察

本研究の主な結果は、以下の通りであった。(1) 本研究の参加者は小学生時代に、P機能よりもM機能が強い教師を理想としていた。(2) 理想とする教師タイプとして、pm型やP型よりもM型、またM型よりもPM型の教師が有意に多かった。(3) 科目の好き嫌いについて、算数と国語、社会と体育、理科と体育、算数と体育、算数と図工、算数と音楽、音楽と体育の間で有意な差が認められた。(4) 理想的教師像をPM型とした者よりも、M型とした者の方が、各科目をより好きであるとする傾向が見られたことを示している。(5) メタ認知について、モニタリングとメタ認知的知識の間、コントロールとメタ認知的知識の間で有意差が認められた。(6) PM型の教師を理想とする者よりも、M型の教師を理想とする者の方が、性格特性の得点が有意に高かった。以下では、理想とする教師像を中心に考察したい。

まず、小学生時代に理想とした教師像につ

いては、P機能よりもM機能が強い教師を理想としていることが認められた。理想とする教師タイプとして、pm型やP型よりもM型、またM型よりもPM型の教師が有意に多かった。これらの結果は、小学生の考える理想的な教師について、P機能よりもM機能が強い教師を理想としていることを示している。また、P機能だけの強いP型の教師を理想とするものは極端に少ないが、M機能だけでなくP機能があるPM型の教師をより望ましいと考えていることを示している。

この結果は、これまでの研究と一致する結果である。松永 (2015)では、幼稚園・小学校教員免許状の取得を希望している学生に理想とする教師像を尋ねている。その結果、教師は厳しいP機能だけでなく、基本的には優しいM機能の強い教師を理想としていることが明らかになった。また、保坂 (2004b)は、高校生では、理想的教師像としてP機能とM機能が影響することを示している。菊野ら(2017)では、教師を目指す大学生に理想とする教師像を尋ねたところ、P機能とM機能を持つ教師を理想とすることが認められた。これらの研究結果は、理想とする教師像として、M機能とP機能の両方が必要という点で本研究と一致する。

ところで、本研究では、P型の教師を理想とするものは1%未満であった。むしろM型の教師を理想とするものが多くみられた。菊野ら(2017)では、PM型、P型、M型、pm型を理想の教師像とする者は、それぞれ32.65%、20.41%、26.53%、20.41%と教師像が分散していた。それでは、なぜ本研究でP型の教師を理想とするものが少なかったのであろう。その理由の一つとして、教える立場としての理想的教師像と教えられる側の理想的教師像の違いがあったからではないだろうか。すなわち、教える教師の立場であれば、子どもたちとのコミュニケーションを大事にするM機能だけでなく、子どもや集団を目標に導くP機能も重要である。そのため、PM型やM型の教師だけでなく、P型の教師も理想とする傾向にあったのではないだろうか。他方、教えられる子どもの立場であれば、子どもを目標に

向かわせるP機能よりも、クラスを楽しく教師と子どもとのコミュニケーションを使って子ども集団を維持するM機能をより重視したのではないだろうか。これらの調査協力者の立場によって、理想とする教師像が異なったのではないかと考えられる。

第二に、好きな科目と理想的教師像の関係について見てみよう。特定の科目と理想的教師像の間に関係は認められなかった。しかし、理想的教師像をPM型とした者よりも、M型とした者の方が、各科目をより好きであるとする傾向が見られた。この結果は、教科が好きであること、すなわち学校の授業が楽しい好きと思う子どもは、M機能を持った教師を理想としていることを示唆している。

第三に、メタ認知と理想的教師像との関係について、メタ認知の高い子どもの方が、P機能よりもM機能の強い教師を理想像とするのだと予想した。しかし、有意な関係は認められなかった。

最後に、性格と理想とする教師像との関係を見てみよう。調査にあたり、社会的適応性の高い者ほど、P機能よりもM機能が強い教師を理想とするのではないかと予想した。本研究では、PM型の教師を理想とする者よりも、M型の教師を理想とする者の方が、性格特性の得点が有意に高かった。ビッグファイブについては、性格得点が高い者ほど社会的適応性が高いことを示している。すなわち、予想した結果と同じように、社会的適応性が高い者ほど、M機能の強い教師を理想とするのだと考えていることを示唆している。知的好奇心が強く(開放性)、真面目で(誠実性)、積極的に外の世界に志向し(外向性)、利他的であり(協調性)、不安や緊張が少ない(神経症的傾向)者ほど、M機能の強い教師を理想とすることを示していた。これらの結果は、社会的適応性が高い子どもほど、M機能の強い教師を理想としていることを示唆している。

V. 引用文献

阿部真美子・井田政則(2010)．成人用メタ認知尺度の作成の試み Metacognitive

- Awareness Inventoryを用いて 立正大学心理学研究年報、1、23-34.
- 青木邦男(2011) 和田及び村上・村上の主要5因子性格特性尺度の因子構造の検討 山口県立大学学術情報、4、27-40
- Brown, A. L. (1978) Knowing When, Where, and How to Remember. In R.G.Glaser (Ed.) *A Problem of Metacognition*, Lawrence Erlbaum Associate 湯川良三・石田裕久(訳) メタ認知：認知についての認知, サイエンス社
- Flavell, J. H. (1976) Metacognitive aspects of problem solving. In L. B. Resnick (Ed.), *The nature of intelligence*. Hillsdale, N. J. : Lawrence Erlbaum Associates.
- Flavell, J.H., Friedrichs, A.G., & Hoyt, J.D. (1970) Developmental changes in memorization processes. *Cognitive Psychology*, 1, 324-340.
- 保坂芳男(2003a) 普通科高校英語教師の資質に関する実証的研究 高校英語教育研究、17、28-42.
- 保坂芳男(2003b) 中学校英語教師の資質に関する実証的研究 中国地区英語教育学研究紀要.
- 保坂芳男(2004a) 理想的な英語教師像に関する実証研究：普通科高校生と中学生の比較を通して 広島大学大学院教育学研究科紀要. 第二部, 文化教育開発関連領域、52、127-133.
- 保坂芳男(2004b) 理想的な英語教師像に関する実証研究(2)：PM理論を用いての生徒の学力差による構造比較 広島大学大学院教育学研究科紀要、53、181-186.
- 石崎園子(2014) 大学生の教職に対する理想像と現実像の関連性:教員志望者の教育実習前後における変化を通して、創価大学大学院紀要、36、279-304.
- 菊野春雄・菊野雄一郎・李琦・山田悟史(2017) 教師を目指す学生の理想的教師像に及ぼす性格的要因 大阪総合保育大学紀要、12、63-71.
- 紅谷博美(1976) 子供が認知した親及び教師の指導類型とスクールモラル・情緒安定・学業成績との関係 愛媛県教育センター教育研究紀要、37、41-45.
- 松永幸子(2015) 教職を目指す学生の教師についての意識:教師という仕事の魅力と児童生徒とのかかわり方、研修とプライベート、今後の教師のあり方にかかわって、埼玉学園大学紀要 人間学部篇、15、67-76.
- 三隅二不二・吉崎静夫・篠原しのぶ(1977) 教師のリーダーシップ行動測定尺度の作成とその妥当性の研究 教育心理学研究、25、157-166.
- 三宮真智子(2008) メタ認知：学習を支える高次認知機能 北大路書房
- 豊田弘司・三木馨(1996) 理想的教師像における大学生と教師の違い 奈良教育大学教育研究所紀要、32、133-136.

